

河村若芝と初期文人画家との関りについて — 祇園南海と柳沢淇園を中心に —

赤木美智（太田記念美術館）

河村若芝（1638～1707）は、17世紀後半の長崎で活躍した黄檗画僧である。若芝は、渡来僧隠元隆琦が寛文元年（1661）に京都宇治に黄檗山萬福寺を開山して以降、17世紀末にかけて黄檗宗がめざましい発展をみせた時期に黄檗寺院を荘厳する絵画の制作を行なった。若芝に関する美術史からの個別研究は成澤勝嗣氏、高橋亜季氏による落款印章の整理とその成果から制作年代の分析を行った基礎研究を端緒とする。両氏の成果を踏まえて、発表者はかつて江戸時代文献の内容の検討と初期作品の分析を行った。そして若芝没後の18世紀前半の文献には若芝への高い評価が見出せること、また若芝が日本人画家としてはいち早く黄檗宗のもたらした目新しい明清の絵画や版本に親しく触れ、作画に意欲的に取り入れたことを指摘した。

本発表では若芝研究のなかで残された課題のうち、後世の画家とくに「初期文人画家」と称される祇園南海（1676～1751）と柳沢淇園（1704～58）への影響について考察を行なう。南海は廻船商人である唐金梅所に宛てた書状で「若芝門弟」を自称し、18世紀前半における若芝に対する高評価を示すことが注目される。また淇園は若芝との直接の関係は確認できないが、若芝の同門である渡辺秀石の弟子、吉田秀雪を絵の師としたことを自身の随筆『ひとりね』に記すことから画系自体は近い。そして後述する人物画には作風や主題選択に若芝作品に通じる点を指摘することが可能と思われる。

祇園南海については先述の書状を手がかりの一つとする。加えて南海の2件の「墨梅図」（東京国立博物館・個人）を中心にとりあげる。若芝真筆と思われる「墨梅図」は確認できないが、長崎に滞在し若芝に影響を与えた渡来文人の蔡簡、弟子の上野若元が描いた「墨梅図」と南海作品とを比較する。この作業を通して南海が若芝の弟子と自称した意図について考察する。

柳沢淇園は「関羽図」（東京国立博物館）と「大黒図」（個人）を中心にとりあげる。若芝が画風を確立した中期以降の「十八羅漢図」（福岡・聖福寺）をはじめとする人物画と比較し、若芝から淇園につながる要素を検討する。

最後に三者を取り巻く黄檗僧を含めた人間関係を概観する。とくに柳沢吉保を中心とする積極的に中国文化を摂取した人々のつながりに注目し、若芝作品が評価され、受容された環境について触れたい。

新しい絵画を模索する南海や淇園にとって、若芝作品は明清絵画学習の手段の一つとして機能したと考えられる。若芝が後世の画家へ与えた影響に関する先行研究では伊藤若冲や曾我蕭白、いわゆる「奇想の画家」の源流の一つとする見解が目立つ印象がある。本発表では若冲や蕭白に先駆ける南海、淇園との関りを考察することで、17世紀後半から18世紀の日本における明清絵画受容の入口として若芝が果たした役割を明確にし、近世絵画史における位置づけの再検討ができればと思う。